6．体験学習プログラム　～国際社会や地域の課題に目を向け、視野を広げる～

ボランティア・NPO活動センターは、学生が長期休暇を利用して国内の地域や治安・衛生環境が安全と判断される海外を訪問し、その地域が抱える問題に触れるとともに、地域貢献、福祉、環境関連の現地NPO・NGOなどとの交流を通して、その課題解決の取り組みなどを学ぶ「体験学習プログラム」を、夏季と春季の休暇期間に実施しています。

異文化間における相互理解と共生を学ぶ海外プログラムでは、本学の専任教員が企画・引率する1プログラムと、NPO・NGO団体が実施する海外のスタディツアーの中から採択した、学生にとって学びの多い3プログラムを実施しました。

また、海外に比べて費用面でも参加しやすい国内プログラムでは、地域のさまざまな課題に目を向け視野を広げる内容で、本学の専任教員が企画･引率するものを1プログラム、センターのボランティアコーディネーターが地域の団体と協力して企画するものを1プログラム実施しました。

全コースが終了した後に実施する参加学生によるふりかえりを兼ねた報告会までを一連のプログラムとしており、報告会を通じてプログラムで得た経験を共有し、各自がさらに学びを深める機会となるだけでなく、報告会に出席した学生が次回のプログラムの参加を考えるきっかけになっています。

		プログラム企画者・団体	行　先	テーマ	実施日時・期間	人数
国内		特定非営利活動法人 森林楽校・森んこ	福井県おおい町 名田庄地区周辺	～限界集落・獣害・古民家利活用を現地で学ぶ～	2017年 2月25日(土)～ 2月28日(火) 4日間	15名
国内		社会学部　教授 筒井　のり子	福島県福島市、 南相馬市、 飯館村、 本宮市、 郡山市	福島スタディツアー ～福島の「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～	2017年 2月24日(金)～ 2月28日(火) 5日間	15名
海外体験学習プログラム	学内企画	政策学部　教授 北川　秀樹	台湾	「台湾の自然、歴史と市民活動～学生、市民との交流から考える～」	2017年 2月24日(金)～ 3月1日(水) 6日間	7名
海外体験学習プログラム	学外企画	ウータン・森と生活を考える会	インドネシア共和国	「ボルネオ・エコツアー　豊かな森の再生を目指して」	2016年 8月26日(金)～ 9月2日(金) 8日間	4名
海外体験学習プログラム	学外企画	アーシャ＝アジアの農民と歩む会	インド共和国	「農村開発の取り組み＆子どもたちとふれあう旅」	2017年 3月3日(金)～ 3月13日(月) 11日間	4名
海外体験学習プログラム	学外企画	ツナミクラフト	タイ王国	「タイ　インド洋大津波被災地で東日本大震災6年目を迎える」	2017年 3月7日(火)～ 3月15日(水) 9日間	4名

○国内体験学習プログラム／福井県おおい町【春季】

■参加学生	
道下　結衣（文学部　歴史学科　3年次生）	村井　俊介（文学部　歴史学科　1年次生）
吉田　　響（文学部　歴史学科　1年次生）	松田ちはる（経営学部　経営学科　3年次生）
桑原田　海（法学部　法律学科　1年次生）	浅川　真博（理工学部　機械システム工学科　2年次生）
仲上　昂希（理工学部　機械システム工学科　2年次生）	松澤　宏紀（理工学部　機械システム工学科　2年次生）
小山　瑞季（社会学部　地域福祉学科　3年次生）	大瀬麻友香（社会学部　臨床福祉学科　2年次生）
森川　栞奈（社会学部　地域福祉学科　2年次生）	織田香朱美（政策学部　政策学科　1年次生）
島内　桃花（政策学部　政策学科　1年次生）	冨上　弥生（政策学部　政策学科　1年次生）
■テーマ　「ふくいエコ・グリーンツーリズム体験～限界集落・獣害・古民家利活用を現地で学ぶ～」	
■協力団体　特定非営利活動法人森林楽校森んこ　公益社団法人ふくい農林水産支援センター	

■行　程　2017年2月25日～2月28日　4日間

日　時		行　程	場　所
2月25日（土）	8：00	JR 京都駅八条口出発	流星館 暦会館 茅葺古民家
	10：30	流星館着、オリエンテーション	
	11：00	雪かき	
	12：00	昼食・休憩	
	13：00	旧暦カレンダー作り体験	
	15：30	雪灯籠まつりの準備	
	18：00	町長との懇談、夕食、地域の方との交流	
	21：00	一日のふりかえり	
	22：00	入浴、就寝	
2月26日（日）	8：00	朝食、ミーティング	流星館 茅葺古民家
	9：00	雪灯籠まつりの準備	
	12：00	昼食	
	13：00	雪灯籠まつり準備	
	17：00	夕食、雪灯籠点灯	
	20：00	星の話	
	21：00	一日のふりかえり	
	22：00	入浴、就寝	
2月27日（月）	8：00	朝食、ミーティング、炭焼き工房へ移動	流星館 炭焼き工房 おおい町役場 茅葺古民家
	9：00	炭焼き体験	
	12：00	昼食、町役場へ移動	
	13：50	おおい町若手職員との懇談、WS	
	19：00	夕食、地域医療、中村ドクターの DVD 鑑賞	
	21：00	一日のふりかえり	
	22：00	入浴、就寝	
2月28日（火）	8：00	朝食、ミーティング	流星館 コンベンションホール前 茅葺古民家
	9：00	保育園の子ども達と雪遊び	
	12：00	昼食	
	13：00	4日間のふりかえり	
	15：00	出発	
	18：00	JR 京都駅八条口着	

道下　結衣
（文学部　歴史学科　3年次生）

ボランティアの経験もしたことがなかったし、また公務員を志望しているため、地方についての学習としていい機会かなと思い参加しました。3泊4日のプログラムの他に、事前学習会と事後学習会があったため、時間をかけて対象地域について勉強できました。しかし、資料や本で調べるだけでは難解なテーマがあり、実際に現地の方に訊いてみないと理解は深められませんでした。そういう意味で、プログラムは基本的に自由な雰囲気で、気軽にいろいろな方に多種多様なお話を伺うことができました。「勉強」「ボランティア」というよりは、現地の方々との触れ合い・協力であったと思います。正直、この体験学習プログラムを通してすべてのことを学習しきったとは言えませんし、得られたことを今後、具体的に活かせるかはわかりません。しかし、現地ではたくさんの言葉や助言をいただくことができ、次の関心につながりました。私個人としては「都市化」ということへの興味を持てました。

炭焼き体験の作業場から。すぐ隣に山

村井　俊介
（文学部　歴史学科　1年次生）

私は地方創生や地域のまちおこしのための取り組みを学ぶことができる点に魅力を感じ、今回の体験学習プログラムに応募しました。行く前までは、地方は都会に比べて活気がないといった印象を持っていました。しかし実際に行ってみると、地方は決して暗くなく現地で出会った方皆さんが明るい表情をされていたことが印象に残りました。体験先のおおい町では町で毎年開かれている雪灯篭まつりのボランティアや町職員の方々とのワークショップなどに参加させて頂きました。交流は非常に楽しく充実した時間であったと感じています。

都市には足りなくて地方にはあるもの、それは支え合いだと思います。地元の為に自ら取り組む人が増えれば増えるほどコミュニティは濃くなり、地域が活性化するはずです。おおい町には自分の思うところを行動に移している方が多くいました。今後は私も地元の現状や課題に目を向け、何ができるのか考えたいです。

雪灯篭まつりの為に雪を広場まで集め、その集めた雪をバケツに詰め型を作っているところ

吉田　響
（文学部　歴史学科　1年次生）

今回の体験学習プログラムで自分は「田舎に逃げる」という将来の選択肢が一つ増えたような体験をした。今は安定性がある、という理由だけで教職免許を取得し、公務員になろうと考えているが、本当にやりたいかどうか疑問を持っている面があった。しかし今回体験先の福井県の方たちと関わらせていただいて、現地の方々は本当に生活を楽しんでいるのだなと肌で感じることが出来た。半年前に福井に赴任してきた地域おこし協力隊の方とお話をさせていただいたとき、「前の就職先に嫌気がさしていたから田舎に逃げてきた。町長自らが協力隊について説明してくれたから福井に決めた」と話していたのを聞いて地域の人のあたたかさを感じた。また、田舎に逃げたことによって今を楽しんでいるのを見て、自分も将来は「物的に恵まれた」都会に就職をするのもいいが、嫌気がさしたら、土地があり、ゼロから自由に何かを始められる「何もない」田舎に逃げるのもいいな、と思えるような体験になった。

雪灯篭まつりで地域の方が参加者に振る舞うお餅をついているところ。多くの子どもたちも参加した

松田　ちはる
（経営学部　経営学科　3年次生）

雪灯籠まつりの作業はおおい町の若手の大人の方が手伝いをしてくださった。男の方が多かったが、どの方も元気があり子どもに好かれていた。作業の手伝いよりも子どもたちと遊んでいる時間のほうが長かったくらいだ。その方たちは「フェスタ」という活動グループなのだが、町のお年寄りの方と餅つきの企画・運営をしてくださった。

3日目の町役場の方との懇談会の後は、おおい町出身者ではないが、地域医療によってたくさんの方々の健康と命を守る仕事をされている中村医師との座談会を予定していた。しかし、急患が入って中村医師が来られなくなり、その代わりに中村医師に密着取材したVTRを鑑賞したり、彼の活動をモチーフにした映画を鑑賞した。直接お話を聞くことができず大変残念ではあったが、VTRの内容だけでも中村医師の活動の様子や苦労された内容が良くわかった。

学生が雪山を削って天然滑り台を制作。滑る部分はしっかりと固めて、子どもが滑り終えた後に障害物にぶつかってけがをしないようにストッパーも雪で手作りした

桑原田　海
（法学部　法律学科　1年次生）

今回のプログラムでは福井県の名田庄というところに滞在していたのですが、この地域には里山の趣と雪が見事に調和した美しい景色が広がっていました。今までいろんな景色を見てきましたが、あんなに自然の美しさを感じたのは初めての経験で、とても感動しました。

私が今回のプログラムを通して感じたこと、学んだことはたくさんありますが、特に自分にとって良かったことは、改めて「ひとの暮らし」における「思いやりと支えあいの心の大切さ」と今まで育まれてきた「地域独自の文化や自然、景観との共生」の重要性を実感できたことだと思います。今回の経験を活かして、今後の大学生活の学びをより発展させていきたいと思います。

雪灯篭まつりで、地域の方々と一緒にトトロの雪灯篭を作った

浅川　真博
（理工学部　機械システム工学科　2年次生）

私が参加した理由の1つ目はIターン、Uターンした方がなぜIターン・Uターンしようと思ったのか、どうしてこの場所を選んだのか、これらのことを実際に伺って聞いてみたいと思ったからです。私はまだ2回生ですが、就職を考える際に都会のほうが雇用は多く、便利なので地方を選ぶことはないと思っていました。2つ目はプログラムを通して普段話すことのできないトップである町長や、若手職員の方々とのワークショップ、名田庄地区唯一の医者として活動されている方など地域の様々な人とお話をさせていただく機会が多く貴重な体験ができると思いました。

実際に行ってみていろいろな人と関わる中でとても親切にしていただきとても温かい気持ちに包まれました。それだけではなくおおい町が抱える問題や、地域の方々が問題に向き合っていることを知りとても刺激的なで、実際に見たり話したりしたからこそ分かることが多いことを実感した体験でした。

地域の人と協力して雪灯篭を作っている様子

仲上　昂希
（理工学部　機械システム工学科　2年次生）

春季体験学習プログラムに参加したのは、出身が滋賀県の田舎で同じ様に獣害がたくさん出ているので、おおい町ではどのような対策がされているのか興味を持ったからです。2日目に役場で、農林水産課の方たちとのワークショップを行いました。そこでは、おおい町での対策や今後の対応策などを話し合いました。そして、現状を役場の人から聞くだけでなく学生との話しの中で新たな取り組みなどのアイデア出し等も行いました。私たちの班では、都心の方で猟に対するイメージの回復や呼び込みを行い若手の猟師を誘致し、住み着いてもらう案などを出しました。

私はもともと、猟師の資格を取ろうと思っていたのですが、今回の役場や現地の方の話で若手の猟師の必要性を知り、地元の猟友会についても調べてみました。資格を取る際の支援だけでなくプロの講習会など開かれており、今回のプログラムを通して猟師の資格を取ることをより考えさせられました。

地域住民や町長を交えてのイノシシ肉のバーベキューの交流会

松澤　宏紀
（理工学部　機械システム工学科　2年次生）

私は今回、春季体験学習プログラムに参加して福井県おおい町を訪れた。ここでは、その中で私は特に印象的だった「地域医療」について感じたこと、学んだことを書かせてもらう。

私たちが今回お会いする予定だった中村伸一医師は25年の間、名田庄診療所の所長としておおい町の地域医療を支えている。その先生の本を読み、訪問診療は患者の人生に寄り添うことのできる最たる機会であり、大切なことであり、中村医師の、人の人生に寄り添っていきたいという思いを感じることができた。

また今回、おおい町長にお話を伺う機会があり、そこで町長は「名田庄は地域絆力が強いことが特徴である」といっておられた。中村医師はその特徴を生かして医療、介護、福祉の密な連携の仕組みづくりに取り組んでこられ、今ではおおい町は地域医療のモデルケースとなっている。近年、農村部、都市部に限らず、地域の住民、医療の関係の軽薄化による様々な問題が深刻化している。これらの問題を解消していくためには地域それぞれの特徴を生かして、地域住民と医療がつながっていくことが地域医療なのだと感じた。

中村医師の著書「寄りそ医」　中村医師が名田庄にきてからの20年の軌跡が書かれている

小山　瑞希
（社会学部　地域福祉学科　3年次生）

私は将来、住民が住みやすいまちをつくることに携わりたいと考えており、まちづくりをするにあたっての勉強になると思い参加をさせて頂いた。参加をするにあたり、おおい町の方たちはどのような施策や取り組みに満足をしているのか、おおい町の子育て支援の現状、今後も残していくべき取り組みとは何かの三つに焦点を当てて学びを深めていきたいと考えた。

この4日間を通して、雪灯篭まつりをはじめとした地域住民全員で作り上げる住民参加型のイベントにより、住民同士や若者とも繋がりが持てることを実感した。

またおおい町長や職員との対談で、15歳まで医療費無償、子育てセンターの充実、生徒の人数に対し先生の数を増やすことでの教育や精神面でのサポートの充実といった制度を設けていることがわかり、このような施策が安心して子育てしやすい地域への前進ともなるのではと考えた。おおい町のように、住民参加型のイベント、子育てのしやすい環境を残していくことで、住みやすいまちをつくることができるのではないかと思う。これらの取り組みを残すために、今私たちには何ができるのかを考えていきたい。

雪灯篭祭りの準備の様子

森川　栞奈
（社会学部　地域福祉学科　2年次生）

普段生活していたら体験できないことを多く体験することができ貴重な4日間になりました。特に一番印象に残ったのは、世代を問わずに人と人との交流が多く繋がりが強いものであることです。普段生活していたら、近所の人とそんなに話すこともないし、交流する人は同じ世代の人たちに限られてきます。その反対で、このプログラムの1つにあった「雪灯篭まつり」では様々な世代の人たちと交流することができました。気軽に「どこから来たの？」や「こんな田舎にわざわざ～」などたくさん話かけてくださり、みんな人に対してオープンな付き合い方であるなと感じました。そして、みんな地元の方々は自分の住んでいる地域が好きで足りない部分は、足りないで受け入れていて、けれども足りない部分を上回るほどの自分が住んでいる地域のよさを知っていて、それを第三者に説明して伝えることができて素敵なことだと感じました。

今まで私は何か自分が住んでいる地域で不満を感じたら、「他のところだったらな～」など自分が住んでいる地域に目を向けていなかったことがわかりました。自分が住んでいる地域を知ることで、初めて第三者によさをアピールすることができると思います。この経験を生かして自分の地域についても関心を深めていきたいと思いました。

保育園の子ども達と雪遊びのあと、タッチでさよなら

大瀬　麻友香
（社会学部　臨床福祉学科　2年次生）

まず「地方」という言葉を聞いて、私は何もないところという思い込みがありました。実際福井県おおい町に行ってみて、確かに都会と比べるとお店や遊ぶ場所が全体的に少ないですが、人と人との繋がりは都会より密であるなと思いました。その事が一番実感できたのは、二日目に行われた雪灯篭まつりです。小さい子からお年寄りまで、地域が一体となった全員が主体の素敵なお祭りとなり、私の住んでいる地域ではこのようなお祭りはないので、新鮮に感じたとともに羨ましくも思いました。

また、三日目にはおおい町役場若手職員とのワークショップがありましたが、疑問に思っていたことや、何気ない質問にも答えてくださり、すごく身近な距離感で接してくださったのが印象深いです。大きな都市になると、自分の住んでいる地域でも市の職員さんと直接お話しできる機会は稀なことであると思います。今回このプログラムに参加して、色々な方たちと触れ合い、お話をしたりする事で、今までの自分にはなかった考え方や物事の捉え方をする力が少し身についたように思います。

これから将来、福祉の分野に就職したいと考

えているので、人それぞれに寄り添い、その方の意思を尊重し物事を提案できるようになりたいなと考えました。

おおい町役場若手職員とのワークショップ

織田　香朱美
（政策学部　政策学科　1年次生）

おおい町での4日間は町長との懇談、雪灯籠まつりの準備・運営、炭作り、おおい町役場職員との懇談、保育園の子どもたちとの雪遊び、といったいままで経験したことのないような濃い4日間だった。

活動する中で、私の地元との差異を感じた。それは2つあって、地域の精神的な密度と若者の地域に対する意識である。おおい町では人口は少ないが、隣の晩御飯のメニューまで知っているほど住民同士の距離が近い。さらに、地域の行事に若者が積極的に取り組んでいたり、他の地域の人にPRしようと取り組んでいたりして若者が元気だった。この2つとも私の地元とは大違いだ。少子高齢化、人口減少が進む今、私たちはおおい町の若者の姿勢を見習うべきだと思う。

おおい町の現状を見てきて、他の地域はどうなっているのだろう、と探究心にさらに火がついたように思う。今回のことだけで終わらすのではなく、様々な地域に出て、吸収していきたいと思う。

おおい町職員の方とのワークショップ。この写真は獣害のもの

島内　桃花
（政策学部　政策学科　1年次生）

今回、福井県のおおい町で様々な人と出会い、たくさんの貴重な体験をさせていただいた。そして、4日間のプログラムを通して、田舎の良さを知ることができた。地元の方も仰っていた、自然の豊かさが魅力であることは勿論であるが、地域住民同士の繋がりが強いと肌で感じた。都会に住んでいると、隣にどのような人が住んでいるかさえ、分からない人も多いかもしれない。一方、田舎では顔見知りがほとんどで、よそ者が来たらすぐに分かるという。また、おおい町長の「個人と個人との良好な関係を支え合っていくことが大切」というお言葉が心に残っている。今こそ、現代の人間関係が希薄化している状況を見直し、地域住民同士で協力し支え合っていくことが必要なのではないかと思った。

私は政策学部に所属しているため、今後、大学で地域に関することを学ぶ機会が増えるだろう。その際には、今回体験したこと、感じたことを活かしていきたい。

ろうそくの灯りがともされ、とても綺麗な雪灯籠。いろいろな形の雪灯籠がある

冨上　弥生
（政策学部　政策学科　1年次生）

今回の体験で学んだことは、人々に住み続けてもらう難しさはどの地方、地域でも同じということだ。今の社会でスマートフォンがなければ連絡も難しくなりつつある中で、便利でない、というレッテルは剥がれにくく、なおかつ視野を狭める元だ。本ではなくインターネット、実際に現地で買うのではなく通販、そのような風潮は今更どうすることもできないし実際おおい町での体験では店や家の少なさに驚かされるばかりだ。現実的な話として人口流出で将来消滅するかもしれないという課題があるが、最終日に一緒に遊んだ子どもたちも便利なおもちゃが

なくても自分たちで遊びを見つけて楽しく笑っていた。地域ブランドとしてふるさと納税やおおい町未来創生戦略など、その子どもたちがなるべく長くおおい町という一地域で過ごせるような努力は続けられている。一発逆転の救済措置がない地方創生という課題にあって、この努力を怠らないことが重要なのだと感じた。

雪灯籠まつりの点火後の様子。雪が少なく、かき集められた中での祭りだったがこのように綺麗な景色が見られた

○国内体験学習プログラム／福島【春季】

■参加学生	
池田　志織(文学部　歴史学科　3年次生)	藤森　真教(文学部　真宗学科　2年次生)
江上　春菜(経営学部　経営学科　2年次生)	武村　和樹(経営学部　経営学科　3年次生)
田中　愛生(経営学部　経営学科　2年次生)	西野　百香(経営学部　経営学科　2年次生)
米本　圭吾(経済学部　1年次生)	辻　　祐児(法学部　法律学科　2年次生)
宮宇地直人(法学部　法律学科　2年次生)	山中　修平(法学部　法律学科　2年次生)
梅木浩一郎(理工学部　環境ソリューション工学科　3年次生)	多田　裕貴(理工学部　機械システム工学科　1年次生)
薮本　　絢(国際学部　国際文化学科　2年次生)	加藤　翔汰(農学部　資源生物科学科　1年次生)
松下　実代(農学部　食品栄養学科　2年次生)	
■引率教員、テーマ	
筒井のり子　教授（社会学部）「福島スタディツアー」 ～福島の“今”を見、福島を生きる人々の“言葉を聞き、そして“自分”を見つめる～	

■行　程　2017年2月24日～28日　5日間

日　時		行　程	場　所
2月24日（金）	8：00	京都駅八条口に集合し、福島に向け出発	京都市
	18：30	宿に到着 NPO法人うつくしまブランチの皆さんと夕食&交流会 ブランチの活動や震災時の様子などについて話を聴く	福島市 【ユースゲストハウス ATOMA・泊】
2月25日（土）	9：00	阿部農園を訪問し、安全な食品をつくるための取り組みについて話を聴く	阿部農園
	10：40	川俣町経由で飯舘村に移動し、地元の方から震災当時の様子や現状の生活などについてお話を聴く	川俣町～飯舘村
	13：00	昼食休憩	南相馬市【セデッテかしま】
	14：00	いわき市在住の卒業生からは現在の生活、震災当時話を聴く。南相馬市社会福祉協議会事務局長と生活支援員の方からは震災当時の社協としての動きや現在の動きについてお話を聴く	【南相馬市社会福祉協議会】
	17：00	宿に到着・ふりかえり	【和風亭　もりのゆ・泊】
	19：00	夕食&ゲストの皆さんと交流する時間	
2月26日（日）	10：00	南相馬市内の視察 銘醸館にてガイドと合流～原町沿岸～小高区沿岸～太田学ガレキ仮置き場～大悲山の石仏（下車・視察）～小高区まちなか（下車・視察）～雲雀が原祭場〈車窓〉～銘醸館にてガイド解散	南相馬市
	12：00	昼食休憩	【道の駅　南相馬】
	13：00	デイさぽーと　ぴーなっつの青田由幸氏を訪問し、発災時の高齢者や障がい者への対応、現在の活動などについてお話を聴く	
	15：00	国道6号線（沿岸部）を南下。Jビレッジ経由で郡山に移動	
	17：30	宿に到着・ふりかえり	郡山市【郡山温泉　泊】
2月27日（月）	9：00	はみんぐBirdの皆さんから、発災時・現状の子育てに関することを中心に、グループをつくった経緯などについてお話を聴く	郡山市【大槻公民館】
	12：00	昼食休憩	本宮市【平井屋 本宮庵】
	13：30	仮設住宅の皆さんと交流	【恵向公園応急仮設住宅・集会所】
	16：00	郡山温泉へ向かう	
	16：50	休憩場所に到着・ふりかえり	郡山市【郡山温泉】
	18：30	夕食・入浴	
	21：00	郡山温泉発	
2月28日（火）	8：00	京都駅八条口着	京都市
	8：15	深草キャンパス着	

池田　志織
（文学部　歴史学科　3年次生）

スタディツアーは就職活動真っ直中であった。参加理由は東京五輪開催にあたって2020年を目安にインバウンド見込んだ目標設定を行っている企業が多いためである。東京五輪誘致の際に安倍首相が福島の原発について質問され「フクシマの原発は大丈夫です」と断言したことが記憶に残っている。社会人になる前に福島の現状を知るべきではないかと考え参加を決めた。

現状は想像を遥かに超え、被災者の口から出る言葉は重みと臨場感を感じた。偽りの情報に翻弄され、取り返しの付かない出来事で溢れていた。また、日本の元気のために取り組まれている対策も矛盾だらけだった。どんなに辛くても前を向かねばならないと、国の決定内容に拳を握り締め耐え忍ぶ人々を見ても、私の無力さが際立った。

原発の問題は私達の世代だけに留まらず、私達の子や孫世代にまで降りかかる。より多くのことを学び、国を動かす力のある人々と関わり、未来に繋げる職に就きたいと決心した。

「未来にも綺麗な自然を残したい」という意味で、吾妻富士

梅木　浩一郎
（理工学部　環境ソリューション工学科　3年次生）

メディアを通した情報だけでは知り得ない、実際に福島を訪れて見て、聞いたからこそ知った事実に衝撃を受けることが多々あった。帰宅困難区域を走る、車を降りることが許されない国道6号線ではやはり、写真では感じなかった身に迫る恐怖があった。

いろいろな人達から話を聞く中で芽生えたモヤモヤという感情。答えが見いだせず悩むほどにこのモヤモヤは肥大化する。この感情こそ福島スタディツアーで得られたものであり、絶やすことなく育み続けていかなくてはならないものだ。そしてこの思いを共有できる仲間を増やすことが、福島スタディツアーに参加した者たちの使命ではないだろうか。そしてなにより福島でお話をしていただいた素敵な人々との出会いがあった。自分自身がどれほどの力になれるか分からないが、彼らがいるかぎりこれからも福島に関わっていきたい。

帰宅困難区域内を通る国道6号線を走るバスの中から。シャッターの閉まった建物、車が立ち入らないようにあるフェンス。奥には倒壊してそのままの建物がある

江上　春菜
（経営学部　経営学科　2年次生）

私が福島に行って、現地の方のお話しを聞いて、被災地を見て特に印象に残ったことは三つあります。まず情報を鵜呑みにしてはいけないということ。次に、今の環境は高齢者や障害者にとって災害があった時に逃げられない状況にあるということ。そして、被災した当事者同士では本音で話すことができないということです。福島やそこに住んでおられる方々は私が思っていた以上に多くの物を抱えておられました。福島で生きていこうとするかっこいい大人に話しを聞いて、衝撃もたくさんありましたが、強い思いに触れることができ、素敵な人たちに出会えて話しを聞けてよかったと思いました。

小高駅

加藤　翔汰
（農学部　資源生物科学科　1年次生）

このプログラムに参加して原発脅威を体で感

じることができた。国道6号線の途中に避難指示区域のエリアがありそこを通って南下した。そこで見た景色は現実とは受け止め難いものだった。震災以降ずっと形を残したまま人が踏み込まずいると雑草は荒れ放題いで廃墟と化していた。初めて見たとき壊れたものを放ったらかし人がいなくなるとこうなるのかと衝撃を受けた。

いつも当たり前のように日々生活しているが天災は一瞬にしてその日常を破壊するのだと再認識することができた。また、原発は私たちに電力として素晴らしいエネルギーを生み出してはいるがデメリットが大き過ぎると思った。僕はこのプログラムで震災はいつ起こるかわからないこと、震災が起こる前に準備しておくことの大切さを学んだ。また、原発がもたらす脅威を知ったうえでどうしていくか考えるきっかけになった。

国道6号線　避難指示区域内での様子　避難指示区域のため撤去できずに倒壊したままの家がある

武村　和樹
（経営学部　経営学科　3年次生）

私は今回、福島に行くことにより福島の現状がわかりました。最近では福島に関する報道が少なかったので復興しているものだと思っていました。しかし、除染物を詰め込んだフレコンバックが山積みにされている光景や、国道6号線から見える双葉町や大熊町の光景は復興には程遠かったです。民家の近くにフレコンバックが並んでおり放射能の影響で発生する熱を逃がすためにそこには小さな煙突が建っていたり、帰宅困難区域で人が住んでいない双葉町や大熊町は今でもはっきりと思い出せるくらい印象に残っています。また原発の事故により目に見えない人と人の溝も感じました。賠償金をもらえる人ともらえない人がおり、どうして少し家が離れているだけでこれほど保証に関することが違うのか疑問に思いました。そして一番感じたのは関西周辺にも原発があるので福島のことを他人事のように考えずにこれからも何らかの形でかかわり関心を持っていこうと思いました。

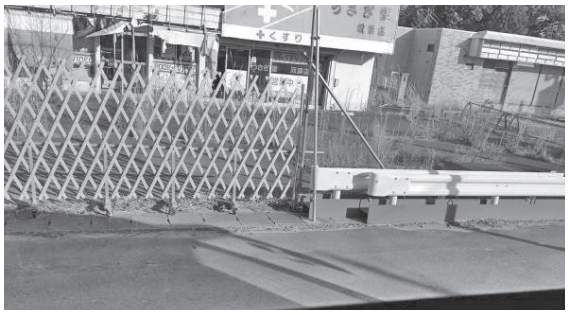
山積みされているフレコンバック

多田　裕貴
（理工学部　機械システム工学科　1年次生）

東日本大震災が発生して6年が経ちました。今回福島の現状を実際に見て、真剣に考えたいという思いからこのプログラムの参加を希望しましたが、全体を通してまだ全然回復していないというのが率直な感想です。

阿部農園を訪問した時、フレコンバッグという汚染土が入った袋が民家の近くにおかれているという現状を見て、怒りを覚えると同時に胸が締め付けられるような苦しみを感じました。デイさぽーとぴーなっつの青田さんのお話では震災を自分事として捉える重要性を改めて感じました。仮設住宅を訪問した時は仮設住宅の方々が今ある現状を受け入れながら、今を必死に生きようと姿に感動しました。

福島の人の話を聞けば聞くほど何とかしたいという気持ちになる一方でどうすればいいのか分からないというのが本音です。しかし、現状から逃げることなく向き合い続ける為にも福島の現状を伝えていきたいと思います。



帰還困難区域の様子。ガソリンスタンドやコンビニなどの店は全てこのように閉鎖されている

田中　愛生
（経営学部　経営学科　2年次生）

このスタディツアーを通して私は、過去に捕らわれるのではなく過去から得たものをこれか

らの未来に活かしていくことが大切だ、と感じました。私たちは今までもこれからも自然災害と共存していかなければならないのです。したがって自然災害によって引き起こされたことを繰り返さないようにしていくことが重要なのだと思います。原発事故が発生し、福島は6年経った今でも避難指示が出ています。このことから原発の発電計画を見直すべきではないでしょうか。また、メディアは情報を現地に流さなかったり隠したりしていたと、多くの方がおっしゃられていました。メディアの情報を鵜呑みにするのではなく自分の頭で考えて調べることが必要となります。これらは、私が実際に現地の方の声を聞いて初めて知ったことです。どんな小さなことでも、これから先に活かして行くことで、少しでも多くの命が救えるのではないでしょうか。

国道6号線。一本の道路以外閉鎖されていて、曲がり角はすべて写真のように柵が置かれている。疑問に思ったことは、一般の人は国道6号線の道路で止まることも許されないが時折柵の前に警備の人が立っていたこと。

辻　祐児
（法学部　法律学科　2年次生）

自分が今回このスタディツアーに参加して考えたことは大きく分けて3つある。

まず1つめは、情報を鵜呑みにするのではなく自分の頭でしっかり考えるということである。震災直後は数多くの情報が錯綜し、何が正しいのかが分からなかったというお話を聞いたためこのように考えた。2つめは福島のことを他人事ではなく自分事として考えることである。災害はいつどこにでも起こりうるが備えがあれば生きていけると言っておられたこと、さらには関西圏も原発と隣り合わせであるため決して他人事ではないと感じたからである。3つめは、震災や原発事故から6年になる福島の現状を自分の目で見たり、聞いたりすることで直接知ることが出来たことである。震災が人と人との間に溝を作り、地域の繋がりを奪い去ることなどにより多くの人々の生活が変わってしまったことなどを知ることが出来た。このように自分が今回見たり聞いたりしたことを周りの人たちに伝えたいし、伝えていく責任があると考えている。

バスから見たフレコンバックの様子。スタディーツアー中何度も目撃した

西野　百香
（経営学部　経営学科　2年次生）

わたしは福島に行くまであまり福島のことを知りませんでした。だから福島に行ってからたくさんのことを知りました。でもたくさんのことを知るたびにもやもやした感情でいっぱいになって、たくさんのことを知ることがしんどいと思いました。けれど本当に経験した人たちの苦しみは、私が感じたしんどさなんかよりももっと辛いものだと思うし、その辛さは経験していない私には理解できないものだと思います。でも私はこのツアーに参加して私たちができる1番のことは、話をしてくださる方たちの話を聞いたり、実際に福島に足を運んだりして、本当の福島の現状などを知ることが私たちにできる1番のことだと思いました。でもそれは私が話を聞くことが1番できることだと思っているだけで、それが正解だとは言い切れないと思います。でも知らなければ私が感じたことや聞いた話、見たものを周りに伝えられないし、私はこれからできる限り伝えていきたいと思いました。

NPO 法人うつくしまブランチの皆さんの話を聴いているところ

藤森　真教
（文学部　真宗学科　2年次生）

このプログラムで感じたのは、前を向いている人よりも、過去に縋っている人の方が多いのではないかと考えてしまった。正直、無いものはない、大事なのはこれから何をして、何を生み出して行く事の方が大事では無いだろうか。震災や、原発災害は確かに悲惨な事だと思う。しかし今は生きているのだからだと思った。

松下　実代
（農学部　食品栄養学科　2年次生）

私が今回印象的だったのは「“フクシマ”は終わりにしなければならない」という空気だ。住民の心を無視して広がるこの空気は昨年訪問した時以上に強く感じられた。「ばかにするな。忘れてなんかやるもんか」私は福島で出会った人々のさみしい笑顔とこの風景を深く心に刻み込む。年月が経つにつれて問題や課題は複雑になり、新たな分断や差別が生まれている。前向きに進む力が大きくなればなるほど、その影は濃くなっているように感じた。しかし、絶望的とも感じられる現実の中でも出会った人々の顔を思い浮かべるとなぜか心が温かく、力が沸いてくる。私は福島と、出会った人たちとつながり続ける。注目し続ける。そして、どんなに難しくて悩んだとしても忘れずに伝え続ける努力をしたい。その原動力は福島で出会った人たちと、そこでできたつながりなのだと思う。私は今、このつながり続けることこそが、本当に前へ進む大きな力になるのだと確信している。

仮設住宅にて浪江町民の方々と再会。私はこの笑顔を見るために福島をまた訪れたいと思う

宮宇地　直人
（法学部　法律学科　2年次生）

今回福島スタディツアーに参加して、福島の現状や震災当初の話や、原発事故による問題などを現地で直接聞くことができて、とても良い経験になりました。福島についてなにも知らなかった参加前よりも福島にもっと関心を持つようになったし、ニュースや新聞記事も見るようになった。まだまだ福島の現実をいろんな人に知ってほしいし、現地に行って、見て、聴いて、衝撃を受けてほしいと思う。福島には、帰還困難区域や原発の廃炉、人間間の溝などまだまだ問題は山積みだ。少しずつでも、福島県に何かしらでつながっていけたらいいなと心から思っている。原発は福島だけではない。僕たちが住んでいる地域にも存在する。

事故が起こってから、対応しようとしても手遅れだ。万が一のことを考えて行動し、準備するべきだと思う。

今回様々な観点から話を聴いて、個人的に地震や原発に対する考え方が養われたと思う。本当に貴重な体験ができてよかった。今後の人生に活かしていきたいと思った。

国道6号線に残るフレコンバックの現状

藪本　絢
（国際学部　国際文化学科　2年次生）

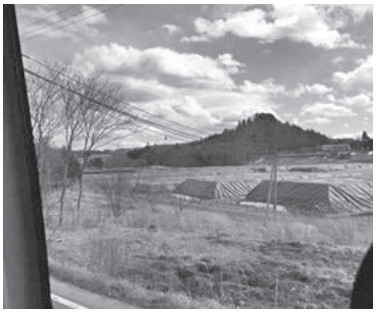
今回私は震災の報道が減るなかで、被災した人々は今何を考えているのかを訊き、被災地の現状を直接目で見て知る為にこのプログラムに参加した。実際ツアーを通して、被災地の現状を直接自分の目で確かめることができた。津波で何もかも無くなってしまった土地や、汚染された土壌が詰め込まれたフレコンバッグを見ると、衝撃が大きく、本当にこの地で大地震と津波があったのかと信じがたかった。現在帰還困難区域に指定されている浪江町を通ったが、家に入れないようにする白いゲートや、中がぐちゃぐちゃなままの建物が生々しく残っていた。これだけ見ても復興はまだまだ終わっていないと感じた。

このプログラムに参加したことで、自分がどれ程震災について知らなかったのか、そして自分達が普段受け取る情報は、必ずしもその情報全体を伝えている訳ではないという事が身に染みて感じた。この経験をきっかけに今後も被災地と関わっていたい。

線量計　空気中と地面近くでは放射線量はかなり差があり、地面近くの方が高い

山中　修平
（法学部　法律学科　2年次生）

今回福島スタディツアーに参加して本当に良かった。実際に現地に行って、見て、聞いて、感じて、考えることの大切さを実感した。また、テレビや新聞などのマスメディアを通じた情報が全てではないということを身を持って感じることができた。今まで私は情報を疑ってかかったことはほとんどなかった。なぜなら、そこまでねじれた報道を見たことがないし、実際にそれを体験していないので、ねじれていても気が付かなかったのだろう。しかし、今回の福島では全然違った。報道による情報が正しいと思っていた私の常識が崩れたプログラムでもあったと思う。どうしてこれを報道しないのか。どうしてこんなにも違う解釈をしてしまうのだろうなどいろいろなことを考えた。また、被災地での状況を見てみると、同じ国で起きていることだと思えなかった。見えない放射能がすぐ身の回りに溢れているという環境で日々の生活を送られている被災者の姿や、除染が終わった汚染土が町中に置いてあったり、原発事故による避難、本当に様々なことが福島県では起きていたし、私が福島に行くまで知らなかったことが多すぎて、常識が日々壊されていく毎日だった。同時にこのような複雑なことの全てをひっくるめて東日本大震災というのではないかと思った。では東日本大震災が完全に終結するのはいつになるのだろうか。今回福島県に行って現地の状況を見せていただき自分の中でもたくさんの発見があったし、初めて知ることもたくさんあった。ぜひ、今まで行ったことのない人にも行ってほしいと思うし、何より現実を知ってほしいと思う。だから、私は他の人に福島をはじめとする東北で被害にあった地域に行くことを知人に勧めたいと思うし、それが被災地の再生のためになるのではないかと考えている。



福島県では除染の際に出た、汚染土がフレコンバッグに入れられ、置き場に大量に置いてある

米本　圭吾
（経済学部　1年次生）

今回、福島に行って学んだことは、自分が東日本大震災について知らないことがとても多かったことだ。一つ目の例は、原発事故によって、帰還困難区域に指定されたところは、たとえ解除されたとしてもなかなか人が戻ってこないということだ。原発事故は、人だけでなく地域のコミュニティも奪ってしまったと実感した。

二つ目の例としては、賠償金が人々の心に溝を作っていることだ。賠償金をもらった人は大切なものを失っている。そこから住む環境を整え、気持ちを前に進もうとしているのに、周囲の理解が得られなかったり、いじめに遭うなど再び辛い思いをしながら過ごしている人がいると知ったことは自分にとって大きな驚きだった。

今回、福島を訪れて、様々な事を学んだ。私は東日本大震災について、常に関心を持ち続け、それを伝えることもしようと思った。

自分が今、放射線量が高い所にいると感じる看板

○海外体験学習プログラム／台湾【春季】

■参加学生	
平尾　匡識（文学部　日本語日本文学学科　1年次生）	永翁ふみな（文学部　歴史学科　3年次生）
和田　萌実（経済学部　現代経済学科　2年次生）	湯川　　希（法学部　法律学科　1年次生）
美濃　優磨（社会学部　コミュニティマネージメント学科　1年次生）	浦　　大介（農学部　資源生物科学科　1年次生）
林田日菜子（農学部　食品栄養学科　1年次生）	
■テーマ、引率教員	
「台湾の自然、歴史と市民活動～学生、市民との交流から考える」 政策学部　教授　北川　秀樹	

■行　程　2017年2月24日～3月1日　6日間

日　程	時　間	活動内容	場　所
2月24日（金）	10：00	＜関西空港4階国際線ターミナル集合＞	大阪
	12：00－14：40	BR181に搭乗、関西空港出発、高雄国際空港到着 専用車にて台南へ移動 ホテル到着	高雄
	夕刻	成功大学学生と交流 台湾の政治、文化やボランティア活動について発表してもらい、 意見交換　【台南大飯店泊】	台南
2月25日（土）	朝	ホテル出発　　専用車で移動 国立台湾歴史博物館見学 　歴史と環境を学ぶ	台南
	昼	「度小月担仔麺」にて昼食（台南料理） 台江国家公園内、七股潟湖訪問・乗船 　自然生態を観察 安平古堡（ゼーランディア城）	
	夕刻	府城食府にて夕食 国立台湾文学館など歴史的た建築物を視察、自由行動 【台南大飯店泊】	
2月26日（日）	朝	ホテル出発　　専用車で移動 鳥山頭ダム、八田與一記念館視察 　1930年に完成したダム、日本人技師が嘉南平野を穀倉地帯に変える	台南
	昼	「湖境度假会館」にて昼食（台湾料理） タパニー事件（西来庵事件）記念館視察 　1915年に起こった抗日事件 日台共同でのごみ回収活動に参加	
	夕刻	「阿霞飯店」にて夕食（台湾料理） 台湾社区大学（民間団体）訪問 　環境保護活動について紹介してもらい、意見交換　【台南大飯店泊】	
2月27日（月）	朝	朝食後、専用車にて台北へ移動	台北
	昼	「金品茶楼」にて昼食（飲茶点心） 環境法律人協会訪問 　環境保護活動、環境裁判について学ぶ 総統府、二二八記念館、立法院視察	
	夕刻	「欣葉台菜本店」にて夕食（台湾料理）　【天城大飯店泊】	
2月28日（火）	朝	専用車にて移動、台湾西本願寺視察 台湾大学訪問 　ひまわり運動、反原発行動に参加する学生と意見交換 「聚馥園」にて昼食（中華料理）	台北
	昼	市内散策（自由行動）	
	夕刻	「大丈壁」にて夕食（モンゴリアンバーベキュー）　【天城大飯店泊】	
3月1日（水）	朝	朝食後、専用車にてホテルから桃園国際空港へ移動	台湾
	12：30－15：55	BR130に搭乗。桃園国際空港出発、関西空港到着　空港にて解散	大阪

平尾　匡識
（文学部　日本語日本文学学科　1年次生）

私が台湾のスタディツアーに参加して学べたことを紹介します。まずは、台湾人の親日についてです。日本が台湾を統治していた間インフラ事業を進めたことが、台湾人の生活水準を向上させることになりました。このことが台湾が親日であることの理由の一つではありますが、戦後台湾を支配した国民党の政策との比較であったり、中国を好む反日の人もいるということもわかりました。

次は、若者の政治関心の高さについてです。ひまわり運動など学生の政治参加の意欲を感じることができました。統治されていた歴史的背景だけでなく、政府、メディアへの不信感から、若者が積極的に現在、そして将来を見据えて行動しているのです。このほかにも、環境、ごみ問題のことも多く学ぶことが出来ました。本や教材から学ぶだけでなく、現地の声を実際に聞くことがとても大切だと思いました。

台湾大学　学生達と歴史・政治・文化について熱く話し合いました

永翁　ふみな
（文学部　歴史学科　3年次生）

「なんと複雑な国だろうか」台湾の大学生とのディスカッション、交流を終え心に残ったのがこの感覚です。私は以前何度か台湾に行ったことがあり、大学では歴史学科ということもあって台湾については知っているつもりになっていました。ですが、日本は台湾を統治していた時代に多方面においてインフラ整備を行い、それが今に活きているために台湾の方は日本に対して感謝をしていること、歴史に無関心なのではなく、現在の関わり方とは別問題という認識を持っていること、「自分は台湾人」という意識が増えつつある中でも中国人、日本人また民族意識という一括りにできないアイデンティティタイプが存在していることなど、台湾の人と接することで多くの発見がありました。台湾の学生は驚くほど積極的に、政治も歴史も学ぼうとしています。では現代を生きる日本の私たちは何を知り、どう行動すべきか。今回のプログラムが私の学びのスタートです。

演歌のような歌や演劇、おかしな格好をした人々にあふれた台湾の市場はまるでお祭！五感全てで台湾の空気を感じられる！

和田　萌実
（経済学部　現代経済学科　2年次生）

今回の台湾で特に吸収出来たと思う知識は政治についてである。私は何故台湾の若者が政治への関心が非常に高いのかという問題を現地で学んだ。一つ目は台湾の歴史だ。台湾はオランダや日本、中国に統治されてきたという歴史がある。そのため「政治に参加しないイコール植民地化への一歩」という考えがどの世代にも根付いている。二つ目は台湾の政治形態が影響している。台湾では選挙をする度に政党を解体するので強い権限を持つ政党が存在しない。そのため台湾の人々は「自分が選挙に行き、政治運動を行えば自分が応援している政党が活躍してくれるかもしれない」と思えるのである。ここから私が感じたのは「台湾は日本より民主主義的である」ということである。日本も民主主義だが日本は自民党に代表されるように強い政党が固定されており、改善されることもない。「日本の若者の投票率の低さ」が叫ばれているが、真の意味で「選挙に行くことイコール自分の意見が反映される」という状況にする必要性があるのではないかと私は考える。

ゴミ拾い活動に参加　収集したごみはかなり細かく分別を行い、しっかりと記録を残す

湯川　希
（法学部　法律学科　1年次生）

私は海外体験学習プログラムに参加するまで日本がアジアの中で最も発展している国だと、どこか傲ったような考えを持っていました。今回台湾で環境問題について学習したことや、大学生と政治に対する姿勢、歴史問題について交流をしていく中で、全然そんなことは無かった、日本が台湾に学ぶべきものはたくさんあるということを感じました。そして日本以外の国を体験することで、日本のことについてももっと知りたいと思うようになり、知る必要があると思いました。

このプログラムに参加することで他の文化の中で生活をすることができるので、様々な経験をすることができました。このような現地の方との出会いやその土地の文化の中で生活することは、日本で生活したり旅行をしたりするのでは、絶対に経験できないことです。本当に毎日が発見の連続で刺激的でした。この経験を生かして、今後広い視野で物事を見られるように、そして社会に対して主体的に行動できるように、努力していきたいと思います。

ごみ回収活動
海岸で拾ったゴミを種類別に分けています

美濃　優磨
（社会学部　コミュニティマネジメント学科　1年次生）

私は2月24日から3月1日まで海外体験学習プログラムに現地の学生や市民との交流から台湾の自然、歴史、市民運動を考えていくという目的で参加した。1日目の夜に成功大学に行き、成功大学生のプレゼンを通してオリンピック参加問題、日本と台湾の関係の歴史について話を聞いた。その後私たちが気になったことを質問させてもらった。「なぜ台湾は同じく日本に支配された韓国と違い親日なのか」この質問に対しては「韓国は国として支配されたのに対し台湾は中国の中の島の一つとして支配されたという違いによるもの」という答えが返ってきた。また「当時の台湾は支配されていた50年間、日本が作った警察機関と法律によって安定した社会秩序が保たれていたこと」「その50年間の進歩が台湾にとってはありがたかった」という理由も教えてもらった。今回の体験学習を通して、台湾についてもっと注目していきたいと感じた。

烏山頭交友会が作った八田与一銅像、今でも大切に保存されダムを見守り続けている

浦　大介
（農学部　資源生物科学科　1年次生）

私は今回の海外体験学習プログラムに参加するまでは、台湾のことについて知らないことがたくさんありさほど興味もなかった。台湾の全てを知りたいと思って積極的に参加してみると、自分が想像もしなかった台湾の姿があった。台湾の風景は日本と似ている所があって過ごしやすく、台湾人もとても気さくで友好的だった。成功大学と台湾大学の学生たちとの交流は特に、日本と台湾の親密さを肌で実感した良い機会だった。成功大学の太陽くん（本名：謝　維釣）とは特に親しくなり、彼の積極的な日本学習には舌を巻いた。日本語がうまく、台湾語を知らない私たちは安心して会話ができ楽しい時間を過ごせた。彼には心から感謝している。

台湾の歴史は他の国から支配されてきた事例が多いがそれでも日本に恩恵を感じ、烏山頭ダムを開発した八田與一さんを英雄として讃えて

おり、日本を心から愛する台湾の精神を随所で感じた。今後も台湾各地を巡ったり、まだ行ったこともない国を訪れたりして自分の視野を広げていきたい。

成功大学の太陽くん（写真中央）　日台合同清掃活動にも参加してくれた

林田　日菜子
（農学部　食品栄養学科　1年次生）

私は、初めての台湾訪問がスタデイツアーで良かったと思う。なぜなら、日台間の歴史や関係について、勉強するきっかけができたからだ。台湾の歴史を知ることは日本の歴史を知ることでもある。台湾を学ぶにつれ、日本の教育には偏りがあると感じた。日本人は近代史の教育が特に乏しい。過去50年間に日本が台湾を統治していたという歴史を知っている日本人はどれくらいいるだろうか。また、その時代に多くの日本人達が台湾で活躍し、感謝され、尊敬されていたということを。その一人に八田與一氏が上げられる。彼は烏山頭ダムの建設計画を成し遂げ、台湾の水問題を改善させた。今なお台湾の人々から尊敬され、銅像や記念館が存在している。日本人として台湾から学ぶことは山程あった。現在、日本と台湾は国交を断絶しており、政府間の繋がりは乏しい。だからこそ、私たちが一般市民という小さな規模から良好な関係を持ち、築き続けることが大事なのだと強く感じた。

台湾大学の学生との交流　学生運動について学ぶ

引率教員講評
北川　秀樹（政策学部　教授）

台湾の別称は「フォルモサ（美麗島）」である。この自然に恵まれた地に、2月24日から6日間、7名の学生とともに訪問し学生、市民と交流した。台湾は亜熱帯、熱帯に属しているが、25日には西海岸の台江国家公園・七股潟湖で乗船、沿岸に生育するマングローブ（紅樹林）や多くの野生鳥類を観察し豊かな生態に触れることができた。

今回のプログラムの目的は、台湾の自然環境を観察し環境保全活動に参加するほか、主として日本統治時代からの歴史をたどり日本や中国との関係を考えること、そして活発な市民、学生運動の源泉は何かを考えることであった。このため、事前学習会では歴史や国際関係について映像も交えながらともに話し合った。また、三冊の課題図書を提示し事前に参加者に読んでもらうことを義務づけた。以下、学生との交流、環境保全活動および抗日記念館の視察について報告する。

24日到着当日、台南市の成功大学を訪問した。同大学の8人の学生がプレゼンを行った。テーマは、オリンピック参加問題、日台の歴史、若者の投票率、女性問題、学生運動、市民運動など多岐にわたった。弁当を食べながら、約3時間にわたる熱気のこもった交流が実現した。本学の参加学生にとっては、台湾の学生の積極性に圧倒される面もあったが、非常に刺激の多い交流であったと思われる。また、28日には台北市の台湾大学で交流を行った。折しも228事件（国民党による市民虐殺事件）70周年の連休中であり、参加学生は大学院生が中心であった。ここでは、当方から事前に準備した三つの質問（政治問題への関心、歴史問題、日本文化）について学生からプレゼンが行われ、当方から質問を行うという形式で進行した。市民ジャーナリストがSNSを利用して大きな役割を果たしていること、日本への好感情は経済実力や大陸と比較しての相対的なものであること、90年代以降の民主化過程で流入した日米のドラマや音楽などに多くの影響を受けたことなど、新しい視点に気づかされる中身の濃い交流であった。当方の課題としては、やはり参加学生がいかに語学力を身につけるかである。中国語を学部生でマスターするのは困難としても英語のスピー

キング、ヒアリングの能力を高める必要があろう。

環境保全活動では、26日に社区大学主催の海岸ごみ清掃活動に参加した。この活動は定期的に行われているものであり、台南市安平港の海岸に放置、漂着したごみを拾うものであり多くの市民がネットでの告知を見て参加している。ペットボトルのふた、銅線の被膜、ストローなどが多く散乱していた。この模様は、台湾の「自由時報」電子版に掲載された。近年、アジアの至る所でこのような海洋ごみの問題が顕在化しており、国境を越えた取組みの重要性を再認識した。

また、台南市では抗日事件（西来庵事件）を記念したタパニ記念館を訪れた。今から100年前の大正時代の事件であるが、当時866人に死刑判決が下された。台湾統治時代はインフラ建設、産業振興、教育などに力が入れられたが、このような負の側面に光を当てることにより、歴史を直視することができたのではないかと思う。

このほか、台湾歴史博物館、日本統治時代の建物、日本人技師・八田與一が建設した烏山頭ダムの視察、環境法律人協会の訪問など、多くの日程をこなすことができた。これからの大学生活にも資する国際感覚と自立心の形成につながることを期待している。

台湾総統府を背景に（2月27日）

○海外体験学習プログラム／インドネシア共和国【夏季】

■参加学生	
池川　　碧（文学部　哲学学科　2年次生）	山田　直輝（理工学部　環境ソリューション工学科　4年次生）
松下　遼真（社会学部　社会学科　3年次生）	大田　純菜（社会学部　地域福祉学科　2年次生）
■テーマ、引率教員	
「ボルネオ・エコツアー　豊かな森の再生を目指して」 学外企画　ウータン・森と生活を考える会	

■行　程　2016年8月26日～9月2日　8日間

日　程	場　所	時　間	活動内容
8月26日（金）	関西国際空港	午前	関西国際空港集合
	ジャカルタ	午後	仁川空港で乗り継ぎ、換金など
8月27日（土）	ジャカルタ	午前	国内線でパンカランブンへ移動
	パンカランブン		船でタンジュンハラパン村へ移動
	タンジュンハラパン村	午後	村についてのオリエンテーション
8月28日（日）	タンジュンハラパン村	午前 午後	環境教育 （森林火災のための消防啓発イベント）
8月29日（月）	タンジュンハラパン村	午前	アブラヤシプランテーションの見学
		午後	オランウータン保護施設見学
8月30日（火）	タンジュンハラパン村	午前	村の小学校訪問 環境学習、授業の見学など
		午後	植林
8月31日（水）	タンジュンハラパン村	午前	村人とのお別れ
	パンカランブン	午後	ジャカルタへ移動、観光
	ジャカルタ		
9月1日（木）	ジャカルタ	午前 午後	現地NGOのプロジェクト現場訪問 マングローブ植林 ジャカルタで自由時間 インチョン経由で帰国へ
9月2日（金）	関西国際空港	午前	関西国際空港着、解散

池川　碧
（文学部　哲学学科　2年次生）

ぼくは今回初めて発展途上国にいった。そこでの生活はまさに日本では考えられないようなものであった。家にはお構いなしに虫がおり、お風呂はトイレの水、または近くに流れている川という生活だ。日本にいるときはそんな生活絶対に無理だと思っていたが、人間4日もあればなれてしまうものである。最終日には素手でゴキブリを捕まえ、泥だらけの川で体を洗っていた。

この8日間は今まで生きてきてきた中で最も濃い8日間だったと思う。この経験は決して日本では味わえないものであり、まさにインドネシアに来たからこそ味わえるものだ。日本に帰ってきても日々の生活がつまらないと感じるほどだ。しかしそれと同時に発展途上国と先進国の差はここまであるのかと思い知らされた。一日働いてやっと800円を稼げると現地で聞いた。現地で仲良くなった男の子に、ふと、「今度日本に遊びに来てよ」と言うと、「インドネシアの通貨が安くて行きたくてもいけない」と言われたことはとても心に残っている。日本とは違う、こんな世界があるのかと大学生のうちに知れたことは、とても大きな経験になった。この経験を無駄にしないようこれからも頑張っていきたい。

泥炭湿地に生えていた大木は、山火事によって根まで燃えてしまった。

山田　直輝
（理工学部　環境ソリューション工学科　4年次生）

今回このプログラムに参加し毎日とても新鮮で刺激的な生活を送る中で、物の見方や考え方、価値観が大きく変わりました。

ボルネオでは植林、防災教育、プランテーション見学、オランウータン見学、ホームステイ、村の方との交流、と、毎日起きてから寝るまで全てが初めてのことで、沢山の刺激や感動がありました。

その中でも防災教育はとても印象に残っています。現地で小学生の子が真剣に火災や泥炭湿地の事を学ぶ姿や、中学生の子が実際に火災が起こった時のために消火訓練をする姿を見て、現地での火災に対する考え方、真剣さを感じました。僕も村から少し離れた場所が一面火災で木が焼けた場所を見て、深刻さを感じました。そしてこの現状を沢山の方に知ってもらいたいと思いました。このプログラムでは沢山見て、学び、考え、とても貴重な経験ができました。感謝の気持ちでいっぱいです。今後も一人でも多くの方に現地に行き実際に見て学び感じてほしいと思います。

植林の前、雨宿りしていた時に仲良くなった子たち

松下　遼真
（社会部　社会学科　3年次生）

私は約一週間ガスも水道もない、電気は決められた時間内、もちろん洗濯機などもないような村で過ごしました。日本では常に清潔を求め、菌など気にして生きてきた私は、心配ごとしかありませんでした。ある日私は、履き終えた下着やＴシャツをまとめていた袋がなくなっていることに気が付きました。次の日、それは折りたたまれてスーツケースの上に置かれていました。ホームステイ先のお母さんが洗濯してくれていたのです。その村では、洗濯は川でするのが当たり前なので、私は臭いや菌などが心配になりました。しかし嗅いでみると、匂いはなく、むしろお日様のにおいがして良い匂いがしました。今まで信じてきた常識が変わった瞬間でした。

実際体験してみないとわからないことはたくさんあります。そのことが学べてとてもいい経験ができたと私は思います。

天気は曇りでしたがとても暑く、一時間の植林で疲れてしまい、活動の大変さを実感した。

大田　純菜
（社会学部　地域福祉学科　2年次生）

私が今回参加したこのプログラムで経験したことは、とても新鮮で二度と経験することが出来ないようなものばかりだった。

その中でも印象的なものは村人との交流である。実は一番不安だったのが村でのホームステイだったのだが、今回のプログラムで一番楽しいものとなった。子どもたちはとても人懐っこくてかわいい子ばかりだったし、ホームステイ先の家族は本当に親切にしてくれた。トイレも思っていた以上にきれいで寝る場所もとてもきれいにしてくれていた。食事も美味しく、様々なものを食べさせてくれた。しかし唯一困ったのは言葉が通じないということだ。英語もあまり通じないためインドネシア語の本をみて話していたのだが、伝わらないことも多くもっと勉強してこればよかったと何度も後悔した。

ここには書ききれないほどの体験をして、本当に参加して良かったと感じている。今後も今回の経験を生かして様々なことに積極的に参加していきたいと思う。

子どもたちと一緒に植林を行った。どの子どもたちも一生懸命に植林をしていた。

○海外体験学習プログラム／インド共和国【春季】

■参加学生	
鬼束　実里（法学部　法律学科　2年次生）	大和　勇弥（理工学部　数理情報学科　3年次生）
西村　　瞳（社会学部　地域福祉学科　2年次生）	坂本　　唯（国際学部　グローバルスタディーズ学科　2年次生）
■テーマ、引率教員	
「農村開発の取り組み＆子どもたちとふれあう旅」アーシャ＝アジアの農民と歩む会	

■行　程　2017年3月3日～3月13日　11日間

日　程	時　間	活動内容	場　所
3月3日（金）	11：00	伊丹空港発（NH022便）	伊丹空港
	12：10	羽田空港着 バスにて成田空港へ移動	
	15：00	成田空港第1ターミナル南ウイング集合	
	17：15	成田空港発（NH827便）　【機中泊】	
3月4日（土）	0：05	デリー空港着 専用車にてホテルへ、ホテルで休憩 デリー駅へ 鉄道に乗りデリーを出発	インド　デリー
		アラーハーバード駅着　【アラーハーバード・マキノスクール泊】	アラーハーバード
3月5日（日）		オリエンテーション 市内観光　【アラーハーバード・マキノスクール泊】	アラーハーバード
3月6日（月）		専用車で移動、農村訪問① ・アーシャ学校での交流 ・アラーハーバード農業組合農家訪問 【アラーハーバード・マキノスクール泊】	アラーハーバード
3月7日（火）		オリエンテーション、継続教育学部の活動紹介 アーシャの紹介 セミナー 「インドと日本の有機農業についての取り組み」に参加 【アラーハーバード・マキノスクール泊】	アラーハーバード
3月8日（水）		専用車で移動、農村訪問② ・農村母子保健活動 ・バザール訪問　【アラーハーバード・マキノスクール泊】	アラーハーバード
3月9日（木）		マキノスクールでの1日体験①【以下より選択】 ①当地農業組合の調理・食品加工実習 ②農作業（インドの有機農業・キノコ栽培） ③農村女性の手工芸 ④奇跡の木モリンガでパウダー作り 【アラーハーバード・マキノスクール泊】	アラーハーバード
3月10日（金）		マキノスクールでの1日体験②【以下より選択】 ①ピザづくり ②ソーセージ＆うどんづくり ③農村女性の手工芸 ④農作業 Farewell Party　【アラーハーバード・マキノスクール泊】	アラーハーバード
3月11日（土）		評価会、荷造り 専用車にてアラーハーバード駅へ 鉄道に乗り、アラーハーバード駅発　【車中泊】	アラーハーバード
3月12日（日）	朝	ニューデリー駅着	ニューデリー
	午前	専用車にてホテルへ移動、休憩	
	午後	専用車にてデリー観光、お土産購入 夕食後、専用車にてデリー空港へ移動　【機中泊】	
3月13日（月）	1：25	航空機にてデリー空港発（NH828便）	デリー
	12：45	成田空港着	成田空港
	17：00	航空機にて成田空港発（NH2177便）	
	18：20	伊丹空港着	伊丹空港

鬼束　実里
（法学部　法律学科　2年次生）

今回のインドスタディツアーで学び得たことは数え切れないほどあります。農業、教育、女性問題、カーストなど今まで全く知識のなかった私には、新鮮味に溢れるものばかりでした。ツアー中にはもちろん、インドのいい面も悪い面も発見しました。いい面は日本人とインド人お互いで共有し、悪い面はインド人と日本人が試行錯誤しあい、改善を考える。私たちがお世話になったマキノスクールでは、その持ちつ持たれつの関係がとてもバランスよく存在していたように思います。

私がインドにいて常に感じていたことは、マキノスクールで働いている人々の聡明さと力強さです。カーストがあまり高くはなくとも農業のリーダーとして輝いている人や、自らチャンスを掴み村の外で働き活躍する女性など、私達日本人から見ても本当に尊敬できる人ばかりでした。インドに赴き、インドのリアルな現状をこの目で見ることができたのは本当に素晴らしい経験でした。

最終日にマキノスクールでホーリー祭りに参加

大和　勇弥
（理工学部　数理情報学科　3年次生）

私は子ども教育に関心があり、今回のツアーの中にインドの子どもたちと触れ合うプログラムがあることを知って参加しました。プログラムで行ったアーシャ学校ギンジ校の子どもたち、観光地で物乞いをする子どもたち、母子保健活動の見学で訪れた村の子どもたち。インドの様々な環境に置かれた子どもたちを見ました。初めての海外で物乞いをしている子どもたちに出会ったことは、私とってとても衝撃的でした。子どもは何も悪くないのに、悲しい目をした子どもに対して何もしてあげられないことが、怒りに似たこれまでにない感情を私の中に生みました。今回のツアーで、インドではまともな教育を受けていない子どもたちもいて、その原因を簡単に変えることができないということがわかりました。今後様々な国に行って子どもたちが置かれている環境をもっと知って、子どもたちがきちんと教育を受けることのできる環境を作るためにできることがないか考えていきたいと思います。

母子保健活動の見学で訪れた村で、少し強張った表情の子どもたち

西村　瞳
（社会学部　地域福祉学科　2年次生）

私はこのインドスタディツアーで特に感じたのは自分が今までどれほど贅沢な暮らしをしてきたかということです。私には教育を受けられる環境が身近にありましたが、インドでは家のお手伝いをしないといけなかったり、先生が学校に来なかったり、様々な理由で学校に通えず教育を受けることのできない子どもがたくさんいます。また、インドは昔からカースト制度というものがあり、生まれた時から身分が決まっているので、それにより差別を受けたり結婚や教育、暮らしなどが制限されます。何か学びたいことがあって家を出るにも親、兄弟、姉妹からの許しを得る必要があり、自分がやりたいことをするには様々な壁があります。自由を制限されることによりその人の可能性はそこで止まってしまっています。私はインドに行き、今までの自分に対する甘え、自分の将来のこと、広い視野を持つ大切さなどを改めて考えました。

こどもたちの元気いっぱいの無邪気な笑顔

坂本　唯
（国際学部　グローバルスタディーズ学科　2年次生）

インドで暮らす10代20代の女性は一体どのような生活をして、何についておしゃべりをしているのだろう。日本という開発の進んだ社会で暮らす私にとって、環境も言葉も文化も違う同世代の女性たちと話をするということは未知の領域であり、とてもワクワクしていました。サムヒギンボトム農工科学大学継続教育学部とNPO法人アーシャ＝アジアの農民と歩む会の支援により創設されたAVS（ASHA・VIKAS・SHAKTIの略）は、農村出身の7人の女性たちがバッグなどの製品を開発している団体です。裁縫技術がない私はただ彼女たちと話をしたい思いで活動を見学しに行きました。団体メンバーの教育を受けたレベルは様々であり、母語が異なるコミュニケーションは簡単なものではありませんでした。しかし、彼女たちと同じ時間を共有することで、違うものが1つに重なる瞬間を体験することができました。何かを変えてやろうという気持ちで開発を進めるのではなく、“そこにいる人々が好きだから”一緒に見える世界を良くしていきたいと強く感じたことを忘れたくありません。

思い出の1枚　一緒に世界をもっと良くしていきたいと願いを込めた折鶴と共に

○海外体験学習プログラム／タイ王国【春季】

■参加学生	
原田　稔久（法学部　法律学科　4年次生）	冬木　伶奈（法学部　法律学科　2年次生）
塩田　智輝（社会学部　社会学科　2年次生）	藤村　一樹（社会学部　コミュニティマネジメント学科　2年次生）
■テーマ、引率教員	
「インド洋大津波被災地で東日本大震災6年目を迎える」ツナミクラフト	

■行　程　2017年3月7日～3月15日　9日間

日　程	時　間	活動内容	場　所
3月7日（火）	09：00	関西空港第1ターミナル集合	関空発
	11：00	TG623搭乗	
	15：45		バンコク着
	16：45	TG217搭乗	バンコク発
	18：05	着後、専用車でホテルへ　【プーケット　ホテル泊】	プーケット着
3月8日（水）		【タイ及びインド洋大津波の基本学習】 専用車にて、ホテル出発→カマラビーチ→パトンビーチ→昼食→カオラックのホテルへ　【カオラック　ホテル泊】	カオラック
3月9日（木）		【コミュニティ・ベースド・ツーリズムを学ぶ】	クラブリ
		専用車にて、クラブリへ移動	
		アンダマンディスカバリーズの事務所にて活動紹介	タレーノーク村
		タレーノック村半日アクティビティ	ナムケム村
		ナムケム村へ　【ナムケム村　施設泊】	
3月10日（金）		【タイ最大の被災地ナムケム村をめぐる】 専用車にて移動、ナムケム村（港・メモリアルパーク）→CDC→バンムアンキャンプ跡→バーンターンナムチャイ（翌日の展示共同作業の準備、予行演習） 【ナムケム村　施設泊】	ナムケム村
3月11日（土）		【東日本大震災6年目をタイの子どもたちと】 専用車にて移動、児童福祉施設の子どもたちと津波で打ち上げられた船に移動、現地時間昼の12時46分（日本時間2時46分）の東日本大震災発生時刻を目指して展示作業展示後、自由時間 クラブリへ移動　【クラブリ　ホテル泊】	クラブリへ
3月12日（日）		【少数民族の島、スリン島1日目】 クラブリ→スリン島　高速船90分 スリン島内は専用船で移動　海洋少数民族モーケンの村を訪問 【スリン島国立公園　キャンプ場】	スリン島へ
3月13日（月）		【少数民族の島、スリン島2日目】 スリン島→クラブリ　高速船90分　【クラブリ　ホテル泊】	クラブリへ
3月14日（火）		【ふりかえり・帰途へ】 専用車にて移動。市場で朝食後、アンダマンディスカバリーズ社にてふりかえり	プーケットへ
	19：35	TG220にて、クラブリ→プーケット国際空港	プーケット発
	21：00		バンコク着
	23：15	TG622　【機中泊】	バンコク発
3月15日（水）	06：25	関西国際空港着 解散　午前8時	関空着

原田　稔久
（法学部　法律学科　4年次生）

今回はじめてスタディツアーに参加して、こんなに楽しく学べるものだとは思っていませんでした。このタイで最も印象に残った2つのことを挙げます。まず1つ目が、バンターンナムチャイという児童福祉施設です。現地の子供たちとのふれあいは、最初は戸惑っていたものの、子供たちから近寄ってきてくれたことで、すぐに打ち解け、とても楽しい時間を過ごせました。また3月11日に子供たちと一緒に行った津波メモリアルパークでのさおり織りの展示では、日本語の歌を歌ってくれるなどとても感動し、貴重な経験となりました。

2つ目がスリン島でのモーケン人との交流です。モーケン人はインド洋大津波の際、昔からの教えにより犠牲者を一人もだしておらず、直接その話を聞けたのはとても貴重な経験となりました。またスリン島はとても美しい島で、とても思い出に残っています。この児童福祉施設とスリン島には、またいつか戻りたいと思います。

モーケン人の方から、彼らの歴史を教えてもらう

冬木　伶奈
（法学部　法律学科　3年次生）

私が今回のタイのプログラムで感じたことは言葉や国境を越えた人と人とのつながり、絆です。特に強くそれを感じたのは5日目のメモリアルパークで東日本大震災が発生した時刻に合わせ児童福祉施設の子供たちと黙祷、祈りを捧げた時です。タイの人たちが直接被害にあわれたわけではないのに、東日本大震災で亡くなられた方や、被害にあわれた全ての方のために真剣に祈りを捧げてくれました。またタイ語と日本語の歌を全員で歌い、国境、言葉、人種を超えタイと日本が繋がったように感じました。タイもインド洋沖大地震で甚大な被害を受けましたが、同じように地震で被害を受けた日本の被災者を悼み、ともに祈ってくれた姿は目に焼き付いて離れません。

日本とタイだけではなくどこの国同士でも、言葉や国境を越え、個人個人で交流することで絆が生まれその連鎖が続けば、国同士での戦争が終わり、全世界が平和になることもできるのではないかと感じました。

メモリアルパークで　施設の子どもたちが手遊びを教えてくれました

塩田　智輝
（社会学部　社会学科　2年次生）

タイの体験学習プログラムに参加した目的は、日本とは異なる環境でパーソナリティ形成について体感することである。読書を通して得た知識を、現地で照らし合わせて、新たな気付きを得るきっかけにしようとした。

今回のツアーは、直接パーソナリティ形成を学ぶことはなかったが、学ぶためのヒントに溢れていた。ひとつ例を挙げる。タイ最大の被災地ナムケム村に、被災後誕生したCDC（Community Development Center）を訪問した際に、コミュニティの在り方から、学ぶヒントを得た。CDCでは、昼間と夜間に分かれ、昼間は子どもの学校で、夜間は大人のための教育という機能を持っている。さらに、CDCは、キリスト教の精神で運営されているが、宗教に関係なく人々を受け入れている。このように、津波対策として誕生したCDCが、村のコミュニティのシンボルになるのである。つまり、多文化のコミュニティの中で、教育が行われ、パーソナリティが形成されていくということだ。CDC以外にも多くの学びたいヒントを得たので、これからの学びに活かしていきたい。

ナムケム村のバンムアンキャンプ跡でさをり織り展示作業の様子

藤村　一樹
（社会学部　コミュニティマネジメント学科　2年次生）

この体験学習プログラムは私にとって、自分の世界を広げる貴重な体験となりました。私はコミュニティ・ベースド・ツーリズムと、日本の津波被害からの復興とタイ王国の津波被害からの復興の違いを勉強するためにこのツアーに参加しました。このツアーに参加して、自分が達成したかった目的を達成できたことはもちろん、それ以外にも多くの学びがありました。今まで日本という国しか知らなかったので、習慣やマナー、食事や交通社会など体験したすべてが新鮮でとても刺激になりました。このツアーで訪れたナムケム村にはCDCというフリースクールがあり、昼間は子どもの学校教育を行っており、夜間は地域の大人に向けた社会教育や技術教育を行っています。CDCはナムケム村の人々にとって地域の交流の場になっているのです。日本にはこのような地域住民が交流できる場所が少ないので、このような場所や機会が必要だと感じました。

人の頭を超える高さの津波が襲った

事 業 名	体験学習プログラム報告会
日　　時	2015年度　春季：2016年 4月19日（火）17時30分～19時30分 2016年度　夏季：2016年10月 6日（木）18時00分～19時30分 2016年度　春季：2017年 4月24日（月）17時30分～19時45分
場　　所	2015年度　春季：瀬田キャンパス　6号館プレゼンテーション室 2016年度　夏季：瀬田キャンパス　2号館多機能教室 2016年度　春季：深草キャンパス　和顔館　アクティビティホール
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	2015年度春季：61名、2016年度夏季：35名、2016年度春季：60名

1. 経緯・目的

国内・海外の体験学習プログラムに参加した学生が、現地でどのようなことを学び、考え、今後のボランティア活動や大学生活等にどのように活かしていくのかを発表する機会として、プログラムの一環で報告会を行っています。より多くの学生に本プログラムに関心をもってもらうため、誰でも報告を聴ける形で実施しました。

2. 概　要

参加した学生が、プログラムごとに、プログラムでの体験を通じて学んだことをそれぞれのスタイルで報告しました。プログラムに参加した学生以外に、プログラムに関心を持つ学生や、受け入れ先（スタディツアー企画団体）のNPO・NGO の方にも参加いただきました。発表概要は下記の通りです。

	訪問地・参加者人数	テーマ
15年度 春季	インド共和国 参加者：5名	「持続可能な暮らしと農業を考える」
	福島県 参加者：15名	「福島の“今”を見、福島を生きる人々の言葉を聴き、そして“自分”を見つめる」
	京都府丹後地方 参加者：15名	「丹後に出会う～地域資源（人・自然・歴史・文化）の活かし方」
16年度 夏季	インドネシア共和国 参加者：4名	ボルネオ・エコツアー 豊かな森の再生を目指して
16年度 春季	台湾 参加者：8名	台湾の自然、歴史と市民活動～学生、市民との交流から考える
	インド共和国 参加者：4名	農村開発の取り組み＆子どもたちとふれあう旅
	タイ王国 参加者：3名	インド洋大津波被災地で東日本大震災6年目を迎える
	福井県おおい町 参加者：15名	ふくいエコ・グリーンツーリズム体験～限界集落・獣害・古民家利活用を現地で学ぶ～
	福島県 参加者：15名	「福島の“今”を見、福島を生きる人々の言葉を聴き、そして“自分”を見つめる」

3. コーディネーター所感

願書を出し、選考を経て参加決定した学生達は、事前学習会でたっぷり勉強して出発に備えます。体験後には事後学習会で活動を振り返り、学びを深めていきます。レポートを書き、報告会に向けて全員で発表資料を作成し大勢の前で発表しますが、この一連のプログラムで、学んだことを改めて共有し、より学びを深めることができていると感じます。

体験後の学生達からは「行ってみなければわからない。自分の目でしっかり見て、感じることが大事と気づけた」「行って本当に良かったけれど、もっと勉強していけばさらにいい体験になったのに本当に悔やまれる」との声が聞かれます。

この経験を糧に、今後も国内・海外での様々な社会問題への関心を広げて、成長していってほしいと思います。

〈報告者：古澤　登美代
（瀬田キャンパス　コーディネーター）〉